

# 「天石屋神話における籠りの意味」

山形 浩 美

「キーワード ① アマテラス、② 籠り、③ 死と再生、④ アメノウズメ、⑤ 子宮的空間」

「籠（隠）り」「籠る」とは、何かで隔てられた場所にとどまることを意味する語である。

籠りという名詞の語義は多く、方言では祭礼の前夜を指したり、繭の中に籠ったまま死んだ蚕のことも指す。「身籠る」「冬籠り」「晦日」などの複合語からも、日本人が人間のみならず自然界の諸相を籠りと名づけてきたことがわかる。

一方日本の祭祀や習俗にも、神職や祭りの参加者が、籠りを行う例が広範に見られる。精進、斎戒、物忌などの神事の籠りは、岩窟や籠り屋、斎屋などに籠り、非日常的な生活を送ることである。祭事においても、忌籠祭をはじめ、大みそかの除夜の籠り、節分籠り、稲作にかかわる田植え籠りや収穫前の籠りを行うところ

ろもあつた。柳田国男はこれらの事例を調査・考察し、「籠ることが祭りの本体である」と指摘している<sup>(1)</sup>。

また通過儀礼では、かつて産婦は出産時に産屋に籠<sup>うぶや</sup>ったところが多く、成年式においても、未成年者が山などに入り籠り、そこから出て来ることが重要視されていた風習が各地に見られる。

このように籠りという現象や行為は多面的に日本文化と関わり、根源的に結びついている可能性も持つていると考えられるが、これまではそのような観点から籠りを主眼に置いて検討されることが少なかった。

日本神話においても、アマテラスの天石屋籠りをはじめとした籠りの行為や現象が多々看取できる。日本神話においてこのように籠りが幾度も形を変えて現れるのはなぜなのか、籠りという行為や現象は、どのような意味を持つものなのか。当論では最も有名でかつ様々な意味を内包すると見られる、アマテラスの天石屋籠りを中心に、日本神話における籠りの意味を考察する。

## 一、アマテラスの天石屋籠りとは

アマテラスは「天照」と言う名の通り、日の女神であり、日本神話における最高女神である。そのアマテラスが弟スサノヲの悪行によって天石屋に籠り、戸を閉ざしてしまう様子を物語った天石屋籠りの場面は、記紀神話における最大の事件と言えるだろう。

記によれば、アマテラスは弟スサノヲがアマテラス所有の営田<sup>みつくた</sup>の畔を破り、溝を埋めたりして荒らし、また新米を食す大嘗の殿に汚物を撒き散らしても、寛容さを示し弟を許していたが、その悪行がさらに極まり

聖なる忌服屋に皮を剥いだ馬を投げ込んで中にいた服織女を殺害したことで、とうとう天石屋に籠ってぴたりと戸を閉ざしてしまふ。大女神を失った高天原と中つ国は、あらゆる災いに満ちた混乱状態に陥った。このいきさつは、記に次のように描写されている。

天照らす大御神の忌服屋にましまして神御衣織らしめたまふ時にその服屋の頂を穿ちて、天の斑馬を逆剥ぎに剥ぎて墮し入るる時に、天の服織女見驚きて梭に陰上を衝きて死にき。かれここに天照らす大御神見畏みて、天の石屋戸開きてさし隠りましき。ここに高天の原皆暗く、葦原の中つ国悉に闇し。これに因りて、常夜往く。ここに万の神の声は、さ蠅なす満ち、万の妖悉に発りき。

このアマテラスの天石屋籠りの意味は、これまでもさまざまに解釈されている。太陽であるアマテラスが籠ることから、日蝕現象の神話化であり、冬至の太陽を復活させる鎮魂儀礼であるとされた大林太良氏、日神の再生の段階を超えて、穀母神としての再生を語るものと見た三品彰英氏らの説があり、また、倉野憲司氏はこれらの解釈を、自然神話的解釈、朝廷と氏族の対立反映説、大祓や鎮魂の儀礼や信仰の反映説など六つに分類されている。

解釈はこのようにさまざまでも、多くの研究者はこの場面にアマテラスの「死と再生」の意味を読み取っている。アマテラスの多くの行動の中でも、特に象徴的で意味深いと思われるのが、この天石屋籠りなのである。またこの天石屋籠りは、アマテラスにとつてのみならず、周囲の神々や世界の秩序にまで影響を及ぼし、日本神話全体にとつても、重大な分岐点であると言えるものである。続いて、アマテラスが天石屋に籠ることになった原因を考察する。

最初の原因となったのは、アマテラスが弟スサノヲとの誓約ちかひに負けてしまったことである。

父に命ぜられた海原の支配を拒否して涕泣し続け、ついには中つ国を追い出されたスサノヲは、妣の国へ行く途中、姉アマテラスに別れを告げようと高天原へ昇る。その様子が「山川悉に動み国土皆震りき」といった激しさだったため、アマテラスは戦闘態勢をとり雄叫びをあげて待ち構えた。そこへ到着したスサノヲは、自分は単に別れの挨拶をしに來ただけで、邪心はないと主張するが、アマテラスは信じようとはせず、二神はこの後、誓約をし、そこから誕生した神の性別で勝敗を決めることになる。

記と紀では、誓約の際に誕生する神の性別や交換する持ち物などに異伝が多いが、共通するのは、スサノヲが誓約に勝利し、よってスサノヲの心が清いと証明されていることである。

誓約の場面からは、最高神としてのアマテラスの權威が、弟スサノヲによってひどく打ち砕かれてしまった様子がうかがえる。アマテラスはこの時点では、スサノヲに負けるほど弱い、未完成な女神だったのである。

続いて語られる、スサノヲが誓約の勝利にまかせて乱暴狼藉をはたらいたことも、アマテラスの天石屋籠りの重要な原因であろう。記では、勝利したスサノヲは、姉アマテラスの神聖な田の畔を破って溝を埋め、田を使えなくしただけでなく、新米を食す場である大嘗の殿をも汚した。姉のアマテラスはここでも弟の乱暴を咎めることなく許している。

だが、これらの事件より天石屋籠りの直接の原因と考えられるのは、この後にスサノヲが引き起こした忌服屋破壊と服織女の殺害であろう。

記によれば、アマテラスの所有する聖なる忌服屋に入って神御衣を織っていた服織女が、スサノヲが屋根から突如投げ入れた逆剝ぎされた斑馬に驚き、手にしていた梭で陰上を衝いて死んだと語られている。この直後にアマテラスは「見畏みて」、つまり恐れおののいて、天石屋に入り籠り、ぴたりと石戸を閉ざす。すると高天原と中つ国は常闇に包まれ、あらゆる災いに満ちた混乱状態に陥ることになる。そこで、八百万の神々が集まり、アマテラスを天石屋から出すために話し合いを持つことになる。

記の内容構成から見ると、アマテラスが天石屋に籠った直接の原因は、スサノヲがアマテラスの稲田を荒らしたことや大嘗の殿を汚したことよりも、忌服屋に馬を投げ込み、服織女を死に至らしめた事件だと読むことができる。だが、スサノヲが殺した服織女がアマテラス直属だったとはいえ、天石屋に籠り入るというアマテラスの反応はいささか過剰であるようにも思えるだろう。この点は紀の異伝を読み合わせると、明確になる。

紀(第七段本文)では、スサノヲの投げ入れた馬に驚き、梭で負傷したが、機織りしていた大女神アマテラス自身だと書かれているのである。ここではアマテラスは負傷するだけで、その死は語られていない。一方、紀(第七段一書の一)では、女性器に負傷して死ぬことになる服織女の名前が「ワカヒルメ」であるとされているが、これがアマテラスの別名である「オホヒルメ」と似ていて、同一の神を指している可能性が強いと考えられている。

つまり、記紀にはあえて明示されてはいないが、本来スサノヲの乱暴によって陰上<sup>ほと</sup>に負傷して死んだのは、他ならぬアマテラス自身だったのである。

多くの研究者が石屋籠りはアマテラス自身の死を表すと見ている。<sup>(2)</sup> 記では服織女が陰上<sup>ほと</sup>を傷つけて死んだとされ、紀ではアマテラスが負傷したと語られているが、この相違は、最高女神のアマテラスの死を直接描くのを避けたためだと考えることができる。

## 二、なぜ天石屋に「籠った」のか

記で語られる服織女の死を、大女神アマテラスの死と読み取ることができるなら、その死はなぜ「天石屋に籠る」という形で表現されたのだろうか。記で初めて死ぬこととなる女神イザナミの場合は、火の神を生んで陰部を火傷し死に至るが、この時は「比婆の山に葬めまつりき」と、一旦比婆の山に埋葬されたと語られている。

では、アマテラスの死の場合、なぜ籠るという形をとって描かれたのか。それはアマテラスを籠らせる必要があつたためだと考えられるのではないだろうか。アマテラスの性質である日神、巫女、蚕神、穀物神などは、籠りと切り離せない特徴を持っている。一旦籠りの状態になり、そこから出てくることが重要視されている点もこれらに共通している。

まずは神話の場面構成から、アマテラスがここで籠ることになった意味を考える。紀の一異伝を除いては、天石屋籠りは、スサノヲの忌服屋への侵害と女神の殺害を発端としている。忌服屋とは、大嘗祭のための神聖な神御衣を織る場所である。そこに籠って機織をしていた服織女アマテラスが、投げ込まれた馬に驚い

て死んでしまうのである。

ここで、殺される対象の服織女だけでなく、忌服屋が侵害されたことも考慮に入れ、その構成を追うと、神聖な忌服屋を侵害し、籠っていた服織女を殺害した後に、天石屋籠りが起こっていることがわかる。

つまり、忌服屋籠りの後に天石屋籠りが置かれているのは、アマテラスがスサノヲの邪魔により達成できなかった忌服屋での籠りを完成させようと、天石屋に「籠り直す」ことが目的だと考えられるのである。忌服屋への侵害から天石屋籠りの場面まで、籠りに失敗し、籠り直すという筋を取り出すことができる。それは、忌服屋における籠りが、どうしても完遂しなければならない、厳粛な籠りであつたからで、その籠りは中断することを許されなかったのである。

では、服織女が忌服屋に籠るとはどういう意味を持つのであろうか。記の内容からは、スサノヲが大嘗殿を汚す様子が描かれていることから、この時期が稲の収穫直前だったことが想像される。その時に服織女が忌服屋に籠っているのは、大嘗祭に献上するための神衣を織っていたからだと考えられる。

柳井己酉氏は、この服織女について、伊勢神宮で年二回行われている神衣祭などの機織の神事を参考にされ、「神聖にして高貴なる女性が、厳重に穢れを祓い清めて神衣を作り、これを神に献上した古代生活は充分考えられる」と述べられ、続いて次のように考えられた。

神衣を調整するに当っては、その場所は極めて清浄なるべく、ここに、忌服屋（『記』）齊服屋（『紀』）の文字が示しているように、汚れなき殿で、清浄潔白なる心身を持つて機織に当たるわけである。従つて機織そのものが既に祭りの一部であるから、機織る処女の心は、過誤なからんことを期して

極度に緊張している筈である<sup>(3)</sup>。

大嘗祭に献上する神聖な衣を織るためには、服織女自身も機屋に籠りの状態になって、外界と遮断され、細心の注意を払って清浄な状態で機織する必要があったのである。そしてこの服織女がアマテラス自身であればなおさら、忌服屋という籠り空間は神聖で不可侵の空間であつただろう。その籠り空間を、スサノヲは、屋根から皮を剥いだ馬を投げ込んで侵害し、驚いた服織女が陰部を傷つけてしまうことになる。スサノヲが侵害したのは、外界と隔てられた結界で聖性を保っていた忌服屋という籠り空間だったのである。

その服織女の忌服屋籠りを中断させることは、なぜ大きな問題となるのか。この忌服屋の場合は、神御衣を織る行為を中断させたことも勿論だが、祭祀や習俗における多くの籠りには一定の期間が決められていたことと考える合わせると、清浄に保たれた神聖な空間の結界性を破ることが非常事態を招いたと考えられるのである。

スサノヲは神聖な籠りの空間である忌服屋を侵害することで、籠りの最中だった服織女Ⅱアマテラスの籠りを中断させた。だが、大嘗祭が滞りなく行われるためにも、アマテラスが真の最高女神になるためにも、一定期間の清浄で厳粛な籠りを経ることは、欠かせなかったのである。スサノヲに忌服屋を破壊され無理やり籠りを中断させられたアマテラスは、もう一度堅固で侵害が不可能な天石屋に籠り直すことで、本来の籠りを遂行しようとしたのである。



### 三、天石屋籠りによる変化

天石屋籠りは、アマテラスにとっても世界にとっても大きな転回点になっている。それはこの天石屋の事件を契機にその前後で変化している事柄が多いからである。

天石屋籠りによって最も大きな変化を遂げているのはアマテラス自身である。アマテラスは誓約でスサノヲに敗北し、勢いに乗ったスサノヲの乱暴を諫める事もせず、ついに忌服屋で服織女Ⅱアマテラスが殺害されることになる。この時のアマテラスの対応は、高天原の支配者に相応しくない、中途半端なものである。アマテラスは支配者として未熟なまま、石屋に籠っている。

越野真理子氏は、アマテラスの成長における天石屋籠りの意味を、次のように位置付けられた。

アマテラスは高天原に女王として赴いていながらも、決して完全無欠の存在ではなかった。(中略)  
アマテラスは当初から至上神であったのではなく、石屋籠りという、「死と再生」のイニシエーション(4)を通過することによって成長を遂げ、高天原の女王としての資質を身につけて行った。

越野氏は、ユング心理学の説明する自我意識発達の過程にてらして、天石屋籠りをアマテラスの成長過程におけるイニシエーションととらえた。アマテラスが最高権力を持つてはいても、まだそれを使いこなせない状態、いわば未熟だからこそ、籠ることになったというのである。一旦籠り、そこから出ることが成年式のイニシエーションになっている例は、日本各地に現在も見られる。アマテラスの石屋籠りは、アマテラス

を正真の統治者にするために不可欠な「籠りのイニシエーション」だったのである。

他方この天石屋籠りの場面は、事件を引き起こしたスサノヲにとっても、籠りのイニシエーションになっていると考えられる。

スサノヲは天石屋籠りを引き起こし、世界を混乱状態にした責任を取らされることになる。八百万の神々がスサノヲに科した罰は、「千座の置戸を負せ、また鬚と手足の爪とを切り、祓へしめて、神逐ひ逐ひき」というものであった。千座の置戸とはスサノヲの所有するものを差し出すことであり、その上鬚や爪を切られ、まさに身ぐるみ剥がれて追放されることになる。スサノヲのこの贖罪の方法も、まるで今まで籠っていた自分の皮を剥がれるような罰になっていると見ることができる。スサノヲが受けたこの罰は、奇妙なことにならうと馬の皮を剥いで忌服屋に投げ込んだことと対応している。つまり、皮を剥いだ馬を投げこんで忌服屋の籠りを失敗させた事件に対し、天石屋籠りの成功の後、自らの皮を剥がれるような形の罰を受けている事になるのである。天石屋の事件は、スサノヲにとっても成年式の役割を果たしていると考えられる。

もう一つ重要なのは、神々の変化である。天石屋の危機に瀕してはじめて、八百万の神々が集合して会議を持ち、協力して非常事態を乗り切ろうとした。それまでは神々の秩序だった行動が見られなかったのが、この事件を契機に、神々はそれぞれの役割を認識して働き始める。これはアマテラスの天石屋籠りが、世界の存亡そのものにかかわるような、重大事件であったことを物語っているとも言えよう。この場面の結末では、神々はアマテラスを天石屋から出させ、スサノヲを罰して追放するという毅然とした措置をとり、世界に安定した平穏な状態を取り戻させているのである。

天石屋籠りを経ることで、アマテラスは未完成な女神から一人前の支配者として采配をふるうようになり、高天原と中つ国も、神々の役割分担のはっきりとした秩序付けられた世界へと変わっていく。天石屋籠りはアマテラスだけでなく八百万の神々にとってもスサノヲにとっても経験せねばならない籠りのイニシエーションとしての意味を持ったのである。

#### 四、アマテラスの籠る性質

アマテラスのさまざまな性質からも、籠りとの関連が読み取れる。アマテラスが天石屋に籠ると、高天原も中つ国も悉く闇となり、永遠の夜が続く。そしてアマテラスが天石屋から連れ出されると、世界はもとのように明るく輝く。このことからアマテラスが太陽そのものの神である事が明らかであろう。太陽は、毎朝東から昇り夕方に西に沈むことから、日々死と再生を繰り返す存在として考えられてきた。太陽が天空にない時間を「太陽の死」としたり「太陽が籠っている」と考えることは、広く見られる観念である。記の歌謡四番歌からも、「青山に日が隠らば、ぬばたまの夜は出でなむ。朝日の 咲み栄え来て」と、日が沈む様子を「こもる」と表現していたことがうかがえる。

また、記紀ではアマテラスと蚕や養蚕とのつながりが語られている。蚕は繭籠りというその生態的特徴から、籠りとの関係が顕著な生物である。紀（第五段一書の十一）では、殺害された女神の死体が発生した蚕をアマテラスが手に入れる場面がある。吉田敦彦氏は、アマテラス自身が蚕のように口に入れた繭から糸を

出すことや、忌服屋に籠る服織女であることを挙げられ、「籠ること、そしてそこから出てくることに大きな意味がある」と述べられた。<sup>(5)</sup>

また、アマテラスと関係深い伊勢神宮の斎宮や巫女の生活は儀式でもあり、内容は明白ではないが、籠りを繰り返すとされている。籠りの空間に籠る服織女Ⅱアマテラスは、忌服屋においては、大嘗祭の衣を織ることだけでなく、籠ること自体が重要な目的なのである。アマテラスが女神として籠りを経験すべき存在であることは、アマテラスの巫女性に通じる。松本信広氏は天石屋籠りをアマテラスと関係の深い伊勢神宮の儀式と関連付ける説を次のように述べられている。

うつりかわりの最も危険な時節に、ちようと花嫁に白い覆いをかぶせる様に、神に遣える女人が、外界から隔離され、覆いまもられたことが想像できる。天照大御神の天岩戸隠れは、こういう意味のいみこもりと考えられ得ないであろうか。ここに注意しなければならぬのは、巫女の間に行なわれたイニシエーション(入門式)の儀式、及び巫女の諸階級の間に行われた昇進の儀式であろう。(中略)入門式に際し、彼らが何等かの覆いにより隔離され、またある暗所に閉籠められ、それが再び明るみに戻される儀式が行なわれたとすれば、吾人は此処に天の岩戸神話の神秘を解くことができるような気がする。<sup>(6)</sup>

松本氏はアマテラスの天石屋籠りに伊勢の斎宮の昇進儀式を重ねて考えられ、天石屋籠りにアマテラスのイニシエーションの意味を読み取られたのである。忌籠りは祭りの前や通過儀礼の折に執り行われ、一定の期間多くの禁忌を守って厳粛に過ごすことであった。また大林太良氏はこの松本説に注目され、「アマテラスを祭る伊勢神宮の最高神官だった斎宮(斎王)の就任式がこれにあたり」「斎宮の野宮における一年が、

神話的原古におけるアマテラスの天岩籠りの儀礼的<sup>(7)</sup>反復なのであり、その限りにおいては斎宮はアマテラス自身の再現という様相も持っていることになる」と述べられている。

このように、伊勢の斎宮・巫女とアマテラス、服織女は、籠りを媒介に結び付いているのである。逆に見れば、その「籠る」という特性から、アマテラスに巫女性が備わっていると言う事が出来るのである。

次に、アマテラスと稲の籠りについて述べたい。アマテラスに稲との深いつながりが見られることは、これまでもしばしば指摘されてきている。紀にはアマテラスが神聖な稲田を所有していたことを示す記述が見られる。アマテラスは、天狭田と長田を御田としたり(第七段本文)、天の垣田を御田としたり(第七段一書<sup>(8)</sup>の二)、アマテラスと思われる日の神が天安田、天平田、天邑田と言う、長雨や旱魃に強い稲田を持つていた(第七段一書の三)とも書かれている。これによればアマテラスは質のいい稲田の支配者であることになる。また第五段一書の一一には月夜見神が保食神を殺害して、死体に生じた穀物の種や稲種、蚕や牛馬をアマテラスが手に入れ、稲の種を栽培させたと語られている。

アマテラスがなぜ稲田の支配者として描かれているのかは、記でアマテラスが生まれてすぐ高天原の統治を命じられた時に、父のイザナキからみくらたなの神という名を持つ御頸珠を授かっていることからわかる。吉田敦彦氏は、たなつものという語が粟、稗、麦、豆等と区別された「稲の種」を意味し、「ミクラタナの神<sup>(8)</sup>というのはそれゆえ、翌年の播種まで倉に納められた稲種を神格化したものにほかならないと思われる」と述べられている。御頸珠を受け取ったということは、アマテラスが稲の支配者であるとともに、稲を体現する神になったと考えられるのではないだろうか。

アマテラスと稲のつながりをもとに天石屋籠りの意味を再検討してみると、石屋籠りは稲の種が稲粃の中に入り籠って誕生を待つことにあたると見ることが出来る。稲種が稲粃の中に入ったまま俵に包まれ、納屋などに大切に保管されて次の種蒔きまでじつと籠っていると考えられていたことは、稲に関する祭りや習俗に頻繁に見られる観念である。また、アマテラスの孫にあたるホノニギも、その名が「にぎにぎしい稲穂の実り」、つまり豊饒を表すことから稲の支配者で稲の化身のような神だが、生まれて間もなく真床追姦にくるまれ籠りの状態になって、中つ国へと降臨した。この真床追姦は、ホノニギを包む羊膜や産着のような存在であり、そこから出てくることは、アマテラスが天石屋籠りから出てくるのとも、稲が稲粃に籠ってそこから出てくる事とも同じ意味を持つ。稲粃そのものであるアマテラスやホノニギが籠りから出てくると、日が照る安定した世界が戻ってきたり、始まつたりするのである。アマテラスもホノニギも、稲の支配者であると同時に稲粃の籠りから出てくる稲の化身のような神でもあるということが出来る。

## 五、石屋籠りと女性器の関係

次に、石屋籠りと忌服屋籠りのもうひとつの共通項である女性器について考察する。

忌服屋の籠りと天石屋籠りを考える際には、どちらも女性器が鍵となっている。忌服屋においてアマテラスとおぼしき服織女を殺害するササノヲは、皮を剥いだ馬を投げ入れることで女性器を傷つけて、間接的殺害をした。そして石屋に籠ったアマテラスを出し、世界を混乱から救うために、アメノウズメは裳を開いて

女性器と乳房を見せているのである。

記では、アメノウズメは次のような振舞いで八百万の神々を笑わせ、石戸を開かせたとされる。

天の宇受売の命天の香山の天の日影を手次に繋けて、天の真折を縋として、天の香山の小竹葉を手草に結ひて、天の石屋戸に覆槽伏せて蹈みとどろこし、神懸りして、胃乳を掛き出で、裳の緒を陰に忍し垂りき。ここに高天の原動みて八百万の神共に咲ひき。ここに天照らす大御神怪しとおもほして、天の石屋戸を細に開きて内より告りたまはく、「吾が隠りますに因りて、天の原おのづから聞く、葦原中つ国も皆闇けむと思ふを、何とかも天の宇受売は樂し、また八百万の神諸咲ふ」とのりたまひき。

アメノウズメが裸になつて踊り、八百万の神を笑わせたために、アマテラスは怪しんで石屋の戸を少し開けてしまった。そこへ待ち構えていたアメノタザカラが力で引つ張り出し、高天原も中つ国も再び日光を取り戻したというのである。

アマテラスの天の石屋籠りは、最高女神としては権威が最も失墜した時に発生しているが、それだけではなく、服織女の女性器を損傷するという方法で殺したことに重要な意味があると考えられる。女神の女性としての象徴である女性器を損傷するということは、女神が女性であることも、母神としての出産の力も剝奪することになる、女神に対する最大の侮辱である。スサノヲがアマテラスを殺害したことは、最高権威者を殺害し、高天原・中つ国の権力構造を冒瀆しただけなく、その女神の女性器を損傷することで、あらゆる出産の力、秩序や豊穡を産みだす源を断つてしまった事になると考えられるのである。

権威を打ち碎かれた上に、女性器を損傷されて死んだアマテラスは、まるで墳墓を思わせるような強固な

石屋に籠る。太陽である最高女神を失ったままでは、高天原も中つ国も乱れ放題となり、八百万の神々だけでは收拾がつかない。どうしても最高女神アマテラスを天石屋から出さねばならない、女神と女性器の権威を回復させなければならないことになるのである。

この頑丈な石戸を開かせるきっかけを作るのは、アメノウズメである。アメノウズメは踊りながら裳を開き、胸乳や女性器を見せる。それを見た神々が大声で笑い、アマテラスは不思議がって石戸を少しだけ開けて、様子を覗き見する。そこで戸を開こうと準備していたアメノタヂカララにより、重い石戸が開けられる。つまり、忌服屋と天石屋の神話は、スサノヲが服織女Ⅱアマテラスの女性器を損傷したのにはじまり、アメノウズメの女性器顕示によっておわる構造になっているのである。

吉野裕子氏は、日本神話において女性器のあらわれる事例をもとに、女性器信仰の存在を推測されている。女性器のあらわれる場面としては、①イザナミが火の神を産んで陰部に火傷をして死んだこと、②スサノヲが忌服屋に皮を剥いだ馬を投げ込んで、服織女Ⅱアマテラスが梭で陰部を衝いて死ぬこと、③天石屋に籠ったアマテラスを出すために、アメノウズメが陰部をあらわにして踊ること、④ホノニニギの天孫降臨の折、道に立つサルタヒコと交渉するのにアメノウズメが陰部を出して道を開いたことなどがあるが、吉野氏は、これらの内容を「女陰の損傷がもつとも高貴な女神たちの死因となっている」ことと、「女陰露出、つまりそれを相手に見せることが重大な非常時に行なわれる」と分析され、女陰が古代信仰の対象であり、その露出が信仰にもとづく呪術であろうと述べられている<sup>(9)</sup>。



吉野氏の分析されたとおり、イザナミとアマテラスが女性器を損傷して死に到ると、必ず世界が乱れ、災いが生じている。アマテラスが石屋に籠ると、高天原と中つ国は永遠の闇に包まれ、あらゆる災いが起こる。イザナミの場合も女性器損傷によって死に、黄泉国に行くが、そこでイザナミの屍を見てしまったことで、イザナキは黄泉醜女という鬼女や恐ろしい姿のイザナミに追いかけられる。そしてやつとのことでも中つ国へ戻る直前、ついにイザナミから中つ国の人を一日に千人絞殺する、と残酷な宣言をされることになる。イザナキは中つ国と黄泉国の通路を石でふさぐことでこの混乱を終わらせるが、人の死は避けることのできない決定事項として、残されることになる。

イザナキは石で塞ぐことによつていわばイザナミを黄泉国に閉じ込めることになるが、最高神であり太陽神であるアマテラスの場合には、どうしても石戸を開いて籠りから出す必要があった。そのためにどうしてもアメノウズメの女性器を露出して、その力を示さなければならなかったのである。

女性器が信仰の対象となった理由は、それが神秘的な出入口であり、胎児の籠る母胎という籠り空間への門だからであろう。女性器という生産・出産の源を失うことは、世界を災いに満ちた混沌の状態へ戻してしまうことになる。これらの神話からは、女神とその女性器の權威を保つことが、世界の秩序維持にどれほど重要と考えられていたかを読み取ることができよう。

## 六、アメノウズメ、籠りを開き、出す力

アマテラスの籠った石戸を開くのに尽したアメノウズメらの神々が、ホノニニギの天孫降臨の際に随従した神々と共通していることは、これまでも指摘されてきている通りである。これらの神々がこの二つの神話で活躍する理由はいくつか考えられるが、籠りの観点から考えると、神々の役割はどちらの場合にも「統治者の神を籠りから出す」ことと考えられるのである。アマテラスは石屋に籠り、ホノニニギは真床追衾にくるまれて籠り、そこから出ることで本当の統治者として活動しはじめることになる。真床追衾はホノニニギにとって誕生や成年式のイニシエーションの意味を持ち、天石屋はアマテラスにとって成年式で、一旦死んで再生することからは、死と再生のイニシエーションであると言えることができる。

この別々の場面で、それぞれの主権神を籠りから出すのに最も肝要な役を果たすのは、アメノウズメである。アメノウズメが開く力を発揮する神であることは、吉田敦彦氏により次のように説明されている。

アメノウズメには、鎖ざされている口あるいは通路を開く女神としての性質が、きわめて明瞭に認められる。この機能を彼女は、右の二つの事件の場面では共通して、自身の女体のいわば神秘的な出入口とも通路とも見なすことができる、女性器を露出してみせることによって果たしたと物語られている。

(中略) 天孫降臨の場面ではアメノウズメは、やはり女性器を露出してみせることによって、それまで八百万の天神の中のだれも開かすことができなかった、サルタヒコの口を開かせ、彼に名と正体を明ら

かにさせた。そしてそれによってそれまで、天の八達之衢に恐しい姿で立ちはだかつたサルタヒコにより塞がれていた地上への通路が開け、日の御子の天孫ニニギがそこを通って中つ国に降臨することが可能になったとされている<sup>(10)</sup>。

この他にも吉田氏はアメノウズメが海鼠の口を切り開いたことを例示し、アメノウズメが開く力を特色とする女神であることを述べられている。

天石屋籠りと天孫降臨においては、統治者であるアマテラスとホノニニギが危機を乗り切るのに、アメノウズメの力が欠かせないということになる。

そしてアメノウズメは、どちらの場面でも同じ方法で二神を救うきつかけをつくる。記にはないが、紀(第九段一書の一)では、ホノニニギの降臨を阻止するように立ちふさがるサルタヒコに対し、「膺乳を露にかきいでて、裳帯を臍下に抑れて、咲喙ひて向きて立つ」ことで、ホノニニギを無事中つ国へ降臨させた。ではアメノウズメが二神を助ける方法として、衣を剥いで、膺乳や女性器を出し、紀ではその上、ホノニニギのために声を出して笑うのは、なぜなのだろうか。

アメノウズメは、開く力を使うために、アマテラスの石屋の前で、裳を開き、裸体となつて舞うことで、神々の口を開かせて笑わせた。そしてそれによってアマテラスを石屋から出すことに成功した。またホノニニギの中つ国降臨においても同様に、自分の裳を開き裸体を見せることで、サルタヒコの口を開かせ、ホノニニギの道を開いた。アメノウズメが開く力を発揮することで、主権者を籠りから出すだけでなく、秩序ある安定した世界が作られることになるのだ。

『日本巫女史』を著わされた中山太郎氏は、天石屋と天孫降臨の場面のアメノウズメの所作から、アメノウズメを巫女としてとらえられた。そして、「かく鉦女が、呪術を行ふ毎に、一度ならず二度までも、性器を利用した点から見ると、此の所作は太古の巫女の常に執ったところの、呪術的作法とも考へられるのである」と言われ、更に天孫降臨の場面については、「サルタヒコとアメノウズメとの間に呪術としての媾合が行はれたのではないか」と推測された。その根拠は、豊前国京都郡城井村の八幡宮で見た神楽の天孫降臨の場面において、アメノウズメとサルタヒコに扮する者が顯然として男女の媾合の所作を演じたからだと言われる。他にも露骨な媾合の所作を含む祭や神楽が少なくないことから、中山氏は「性器を利用する呪術の真相が、釈然した」とまとめられている。

また、アメノウズメが裳を開いて裸体を示す行為には、女神の母神としての性質を読みとることができる。女性器は神秘的な出入口であり、子を産み出す力、生産力を最も要求される場所で、乳房は産み落とした子に分泌物の乳を与える器官である。アメノウズメが裸体になりアマテラスやホノニギを籠りから出すことに成功したのは、アメノウズメの母的な力、ちょうどアメノタヂカラヲなどの男神の持つ腕力とは対極にある、母ならではの出産の力で、アマテラスとホノニギを、あたかも再び出産するように籠りから出したのではないだろうか。

換言すれば、アマテラスとホノニギのように籠りの状態になった神を復活させるためには、女神の産み出す力を存分に発揮する必要があった。そのためにアメノウズメは裳を開き、母神として「母乳を掛き出で、裳の緒を陰に忍し垂りき」といった姿を見せるのである。

アメノウズメのこれらの行動に対して、柳井己酉朔氏は「出産の印象が濃厚に感ぜられる」と述べられ、天石屋籠りは、天孫降臨と同じ復活の方法をとる神話であり、真床追衾はその役割から胎児の胞衣にあたる<sup>(12)</sup>と考えられた。

天石屋籠りと天孫降臨の場面では、どちらも主権神を籠りから出すために、アメノウズメは出産の擬態を行なっていると考えられるのである。

ホノニギが真床追衾にくるまれている状態は、西郷信綱氏らにより母胎の中にいる、または胞衣に籠っている事であると解されているが、天石屋の場面でのアマテラスにとっては天石屋が胞衣や母胎的空間となっており、アマテラスが再生するためには、一旦籠っても必ずそこから出なければならなかったのだ。

主権神のアマテラスとその孫ホノニギは、どちらも母胎にも胞衣にも例えられる空間に籠り、一旦死んだ状態になってからアメノウズメという生み出す力の強力な女神によって、その籠りの空間から出されることになるのである。

## 七、籠りから再生する神

では次に、アメノウズメの力によって産み出される側の神アマテラスとホノニギについて考えてみたい。ここにも出産と似た原理が見られるのではないかと思われる。アマテラスが石屋籠りから脱するのは、アメノウズメらの神々の力もあるものの、鏡に映る自分の姿を見て、自らが戸から少し出て来かけたことが契機

となっている。その様子は記に次のように語られている。

天照らす大御神いよ奇しと思ほして、やや戸より出でて臨みます時に、その隠り立てる手力男の神、その御手を取りて引き出だしまつりき。すなはち布刀玉の命、尻久米縄をその御後方に控き度して白さく、「まこより内にな還り入りたまひそ」とまをしき。

籠りの空間から再生するアマテラスは、外を氣にして自分から戸を開き出て来かかつて、そこをタヂカラフに引つ張り出されている。そして石屋の中に二度と入ってはいけなと言われ、しめ縄を張られてしまうのである。

アメノウズメが胸乳や女性器を露出して母的な力で神を籠りから出すのと呼応するように、アマテラスも自ら石屋の戸を開けるのである。これは、出産において母親の産み出す力だけでなく胎児自身の外へ出ようとする力も作用してはじめて新生児が誕生すること、非常に似ているのではないだろうか。同様にホノニギについても、真床追衾にくるまれて中つ国に降臨する時の記の描写はやはり、籠りを開いて出て来る印象の強い表現となっている。

かれここに天の日子番の穂の邇邇芸の命、天の石位を離れ、天の八重多那雲を押し分けて、稜威の道別き別きて、天の浮き橋に、浮きじまり、そりたたして、竺紫の日向の高千穂の霊じふる峰に天降りましき。

ホノニギが威勢よく道を押し分けて中つ国に降臨したということは、紀でアメノウズメが胸乳と女性器を剥出しにしてホノニギの中つ国への道を開き、真床追衾の籠りから出したことに、やはり呼応している

と思われる。ここでもアメノウズメの母的な産み出す力と、ホノニギが威勢よく出ていこうとする力が合わさって、ホノニギは真床追衾の籠りから出て再生するのである。

このことから、アマテラスやホノニギが母胎的な籠り空間である天石屋や真床追衾から出るのには、アメノウズメの露出した女性器の「産み出す力」だけではなく、自らも外へ出ようとする力を発揮しているという事がわかる。

ここまで、おもにアマテラスの天石屋籠りやホノニギの天孫降臨の場面を取り上げて、神々の籠りの行為の意味と、籠り空間の役割を考察してきた。概して言えば、籠るとは、一旦死んだようになってその空間にとどまることであり、そこから出てくることによって再生することになると考えられる。籠りの空間は、いわば子宮や胞衣として、中に入る者を守る役割を果たしていると思われるのである。

日本神話全体を見ると、他にもオホクニヌシの神話やコノハナノサクヤビメ・トヨタマビメの産屋籠り、サホビメの稻城への籠りなど多くの籠りの場面がある。今回は取り上げることができなかったが、これらも天石屋の物語などと同様の籠りの意味を持つと考えられる。籠りを伴う場面には、表層的にしろ、深層的にしろ、母胎への籠りとそこから再生するという意味が見られるのである。

とりわけ、そのような母胎への籠りの観念が強く読み取れるのは、記紀神話の国生みの場面である。

記では、イザナキとイザナミはひとのまぐはひを行ない、淡道の穂の狭別の島から大倭豊秋津島までをイザナミが「生みたまひき」、つまり出産するという方法で誕生させている。日本列島のほとんどの島はイザ

ナミの母胎から誕生したと語られていることになる。

同様に、紀にも以下のような国生みの場面の記述が見られる。

・産む時に至るに及びて先づ淡路洲を以て胞とす。

(第四段本文)

・二の神、合爲夫婦して、先づ淡路洲・淡洲を以て胞として大日本豊秋津洲を生む。

(第四段一書の六)

・磯馭慮嶋を以て胞として淡路洲を生む。

(第四段一書の八)

・淡路洲を以て胞として、大日本豊秋津洲を生む。

(第四段一書の九)

この場合、イザナキイザナミの夫婦神から最初に誕生した島が胞となつて、次にまた島を生むと語られている。そして胞から誕生する島は、本州をはじめとした日本列島である。最初に生まれた島が海に浮かびながら、まるで出産の時に胞衣が胎児から離れるように、日本列島が生まれるのである。日本列島が胞衣の籠りから誕生したということは、生まれるということが、胞衣から分離する、胞衣の籠りから出ることだと考えられていたことになろう。

また、胞とされる島が原初の島として今も信仰される聖地であることから、胞自体も同様に神聖視されていたということができよう。

紀の国生みの表現からは、記よりももっと鮮明に、人間の出産との類似が描かれている事がわかる。島々にはそれぞれ神の名が付けられており、日本神話にとって、日本の島々は単なる大地ではなく、イザナミの母胎から生まれた子供の神々なのである。

このことからあらためて、籠りの意味が日本神話に占める重要性が認識できる。



注

- (1) 柳田国男「物忌みと精進」『日本の祭』角川文庫、一九五六年P 87
  - (2) 大林太良「スサノヲは三度殺す」『東アジアの王権神話』弘文堂、一九八四年
  - (3) 柳井己酉朔「天岩戸神話の研究」校楓社、一九七七年P 59―60
  - (4) 越野真理子「アマテラスの成長」雑誌『学習院大学国語国文学会誌』第36号
  - (5) 吉田敦彦ほか「天皇制の神話」『日本学』一九八九年五月No.13
  - (6) 松本信広「東亜民族文化論攷」誠文堂新光社、一九六八年P 279―280
  - (7) 大林太良「神話と世界像」『国文学』第23巻14号
  - (8) 吉田敦彦「日本人の女神信仰」青土社、一九九五年P 136―148
  - (9) 吉野裕子「日本古代呪術」大和書房、一九七五年P 74―85
  - (10) 吉田敦彦「小さ子とハイヌウエレ」みず書房、一九七六年P 41―72
  - (11) 中山太郎「日本巫女史」八木書店、一九七四年P 213、P 236―243
  - (12) 柳井前掲書P 316
  - (13) 西郷信綱「古事記の世界」岩波書店、一九六七年P 135
- なお、記紀の本文引用は以下による。
- ・新訂『古事記』武田祐吉、中村啓信、角川文庫、一九七七年
- ・日本古典文学大系67『日本書紀』坂本太郎、家永三郎、井上光貞、大野晋、岩波書店、一九六七年

## “The Meanings of Confinement in AMENOIWAYA Story”

Hiromi YAMAGATA

AMENOIWAYA story tells about AMATERASU, the greatest goddess in KOJIKI and NIHONSHOKI. It mainly testifies to the goddess death and rebirth. Still, from the viewpoint of confinement some new interpretation can be added.

Confinement in AMENOIWAYA cave tells that AMATERASU shut herself in a stone cave. This act plays a key role in a initiation ceremony, not only AMATERASU, but SUSANOWO, the rest of deities and nation itself. AMENOIWAYA story continues from destruction of IMIHATAYA, a sacred hut for weaving, these stories have the composition that success of confinement occurs after failure of confinement. KOMORI, confinement was decided to stay in a limited space solemnly for a certain period.

Besides, IMIHATAYA and AMENOIWAYA stories begin with motif of injury of female genitals and end with motif of show of female genitals. AMENOUZUME shows her naked body with her breasts and genitals to let AMATERASU out of AMENOIWAYA cave. The action of AMENOUZUME can be thought as mimicry of giving a birth. AMENOIWAYA cave is a symbol of mother's womb. AMATERASU is a goddess of rice, so AMENOIWAYA cave also plays a role as a hull of unhulled rice

In KOJIKI and NIHONSHOKI, IZANAMI, the first mother goddess, “bore” islands of Japan, or the first island bore the rest of islands as a placenta.

KOMORI in Japanese mythology means confinement of a baby in mother's womb and of rice in a hull.

「天石屋神話における籠りの意味」

山形 浩美

記紀神話の最高女神アマテラスの天石屋籠りは、主にアマテラスの死と再生を意味すると考えられてきた。だがこれを籠りという観点から見ると、また新たな解釈を付加することができよう。

天石屋の場合は、アマテラスが籠りを経ることで、アマテラスだけでなくスサノヲや他の神々、また国家そのものにとつても、通過儀礼としての役割を果たしている。忌服屋破壊に続いて天石屋が起こっていることから、籠りの失敗の後に籠りに成功したという構造が発見できる。籠りとは、一定期間一ヶ所で厳粛に過ごさねばならないものだったのだ。

加えて忌服屋と天石屋の事件は、服織女の女性器損傷のモチーフから始まり、アメノウズメの女性器顯示で終わっており、この二点から女神と女性器の権威を取り戻す神話であるとも解釈できる。アメノウズメは裳を開いて裸を出し、神々の口を開いて笑わせ、天石屋からアマテラスを出すことに成功する。このアメノウズメの行動は、出産の擬態とも考えられ、そうすると天石屋は子宮の役割を持つのである。同様にアマテラスが稲の女神であることから、天石屋は、稲種にのつての粃でもある。

記紀ではイザナミが日本の島々を「出産した」と語られたり、最初の島が胞となつてそこから他の島々が誕生したとも書かれている。

日本神話における籠りは、胎児の母胎への籠りや、稲の粃への籠りと同様の意味を持つと考えられるのである。

\* 山形浩美 略歴

一九九六年（平成八年）三月 学習院大学文学部日本語日本文学科 卒業  
一九九八年（平成十年）三月 学習院大学大学院 人文科学研究科 博士前期課程 日本語日本文学専攻 修了

「天石屋神話における籠りの意味」(山形浩美)

一九九八年(平成十年)四月  
学習院大学大学院  
人文科学研究科  
現在に至る

博士後期課程  
日本語日本文学専攻  
入学